

# 動労「本部」による4.15津田沼襲撃とそれを容認する国鉄当局を弾劾する!

## 日刊 動労千葉

80.4.30  
NO. 50

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八(動力車会館)  
電話二三五八〇九(公巻)二三二七二〇七

### 声 明

国鉄千葉動力車労働組合闘争委員会は、動労「本部」一部反動分子による八〇春闘決戦スト破壊を意図した4・15津田沼襲撃という暴挙と、それを容認し動労千葉破壊の絶好のチャンスとして処分攻撃を画策する、国鉄当局に対し満腔の怒りと重大な決意をもって弾劾する。

[1]

われわれは、こんにちまで動労の名を僭称した一部反動分子による常軌を逸した数限りない蛮行に対し、真に職場・生産点に責任を持つ者として、隠忍自重し、堪えに堪えてきた。

しかし、「本部」一部反動分子が、去る四月十五日「動労『本部』直轄の津田沼特別班」なるものを前日に急拠デッチ上げ、それを口実に二六〇名のヘルメット部隊をもって津田沼電車区に押しかけ、明白なスト破壊を意図した武装襲撃をかけるという、労働組合にあるまじきエスカレートをもってのぞんできた以上、われわれは、もはや絶対許すことはできないと決意した。

「本部」一部反動分子は、暴力をもってスト破壊策動が動労千葉組合員の当然の怒りによって粉砕されるや否や、「動労千葉が暴力をふるった」と事実を逆転させ、「正式書面」をもって「動労千葉を処分せよ」と国鉄当局に申し入れるに至っている。これが、戦闘的・階級的と称する動労「本部」の今日の姿である。

動労千葉は、一九七九年三月三十日結成以降、革マル学生を先頭とした一五〇名の「本部」暴力集団が投石、竹やり、カケヤ、ベンチ、ノコギリをもって襲撃し、片岡津田沼支部長に頭蓋骨折の重傷を負わせ、庁舎を破壊し、一〇〇本の列車を運休させた「4・17津田沼事件」をはじめとする暴力襲撃に対し、権力、当局の介入を拒否し、毅然と対応し、職場生産点に真に責任をもつ労働組合の原則をもって闘い抜いてきた。

この動労千葉の基本姿勢は労働運動・階級闘争を闘う者の常識に踏まえた当然のものであり、不変である。「本部」一部反動分子の「10・22」11・11「スト」「八〇春闘決戦スト」に対するスト破り行動と「正式文書」をもって労働者への弾圧を権力・当局に要請する姿勢こそは、彼等が労働運動とは全く無縁なファシスト的セクト運動をもって動労を私物化していることの何よりの証左である。

[2]

村上、竹内、奈良、室井等札付きの革マル反動

分子に指揮された4・15津田沼襲撃による八〇春闘決戦スト破壊の意図は次のような事実によって明々白々である。

- ① 四月十四日に急拠「津田沼特別班」なるものの「結成」を当局に通告し、その支援と称して翌十五日には自称「二六〇名」のヘルメット部隊を動労千葉のスト拠点である津田沼へ投入したこと。
- ② しかも、この「特別班」結成とヘルメット部隊の投入が「本部」革マル反動分子が「構成員」であると主張する「短期転勤者」に四月十五日当日まで全く知らされておらず、「構成員」自身から今日に至るも激しく反発・追及されていること。
- ③ 二六〇名のヘルメット部隊とは別に「ライトエース」で大量の青竹を持ち込もうとしたこと。(青竹の搬入は国鉄当局とのボス交によりその半分を持ち込み動労千葉部隊への襲撃時には一〇本余が使用された。)
- ④ 二六〇名のヘルメット部隊が事前に庁舎側の動員者を立たせ、線路側の動員者を座らせて投石用の石をあらかじめ用意した布袋やポケットに詰め込んだこと。(「本部」側組合員も「アレはマズカッタ」と認めている。)
- ⑤ こうした準備のうえで、動労千葉隊列の側面に投石しながら竹竿で突っ込んできたのである。

四月十五日の暴力によるスト破り・八〇春闘破壊策動の事実以上の通りであり、これは当日居合わせた全ての組合員の眼前で展開されたことであり、「本部」一部反動分子のデマ宣伝は自らの不正義性を自己暴露する以外のなにものでもない。

[3]

われわれは同時に、国鉄当局が、かかる「本部」一部反動分子の反動的意図を百も承知でそれを容認し、ねじ曲った意図のもとにこれを利用して、処分攻撃をもって動労千葉破壊の策動を開始してき

(裏へつづく)

